

世二

和書門			
四八七八〇	函	架	冊
二七	一		
九三			
類	號	架	冊

內閣文庫		
四八七八〇	函	架
二七	一	
九三		
類	號	架

內閣文庫	
番號	和 48780
冊數	93 (32)
函號	149 112



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TMI: Kodak



武德編年集成卷之三十二

木村高敦撰

天正十四丙戌年

正月小

○十日 神君濱松ヨリ岡崎ニ至玉フ

○十三日 織田信雄ノ使織田源五郎長益羽柴

下總守勝雅天野佐左衛門雄光叅向シテ

神君ノ上洛ヲ再ニ催フスト云ハトモ一切御許

容ナク重テ来ラハ其命危カラント宣フニ使室

シク皈ル 神君甲州巨摩郡武川ノ士ニ尊簡ヲ

賜了

今度泥人... 親親... 去秋ハ... 保セ...

五月十三日 家康

武川宿中

○釣命ニ依テ本多正信 後任佐大久保忠隣 後任相摸守是人ハ忠世 西人書ヲ呈ス

今度泥人... 親親... 去秋ハ... 保セ...

五月十日

正信

忠隣

武川志中

山名正

○十九日 神君冬州額田郡吉良ニ獵シ玉フ

○廿一日 織田信雄ノ使源五郎長益羽柴下總
守勝雅土方勅兵衛雄久下向言上メ曰秀吉ヨリ
徳川家ノ上洛ヲ催シ許容ナクンハ毛利浮田四
國北國ノ勢ヲ卒テ冬州ヲ襲ハント企ツ信雄ヲ
モ相謀テ天下ノ政務ヲ執セント称シ江州ニテ
馬留料一万石ヲ授ケ大納言ニ轉任シ此ニ使ノ
内下總守ニ羽柴氏ヲ與ヘ加恩ノ地ヲ施シ其餘

信雄ノ元老ニ采邑ヲ増封シ自然ト信雄并長臣
ノ妻子ヲ大坂ニ移シ質ト成スエハ長久手ノ救
援其深恩妄却セスト云ハ氏質人ヲ収ル上ハ爲
方ナク表ハ秀吉ニ屬セン欲早ク上京シ玉フハ
レト云ク 神君鷹ヲ臂メシ此鷹一居ヲ以テ手
配リシ一戦ヲ快クセシ吾何ソ秀吉カ下風ヲ望
ニ
○廿二日 羽柴勝雅又伺候ス 神君汝等未タ
飯ラスマ去々年申ノ霜月信雄ト和融ノ時秀吉
ヨリ 家康ハ以来聊等閑有ハカラサル由ヲ達

レ或ハ信雄ノ御父家康公杯ト敬シタル書状
ヲ送り去年霜月ハ吾老臣石川伯耆守ニ十万石
ヲ封セント約シ大坂へ招ク其表裏ヲ憎シテ是
ヨリ兵ヲ發シ秀吉カ領國ノ中ニ入戦セント欲
スト云ハ信雄ノ分國其通路タルヲ忌憚リ今
日ニ至ル処ニ剝吾上洛ヲ促スト奇怪ナレ氏尚
信長公ハノ前盟ヲ守リ尾州ノ地ハ進発スハ
カラス渠カ攻来ルヲ待テ戦ヲ決セシ渠出軍跡
跡セハ武田信玄カ侵畧セシ東美濃土岐遠山惠
奈ニ郡ヲ此方へ伐取ニ其時秀吉奮激シテ兵ヲ

率ヒ戦ハシテ是吾カ頼フ處ナリト宣フ

○豊臣家譜等ノ諸録ニ翌日羽柴下總守再ヒ
神君ニ謁ヲ請フエハ神君出テ見一汝等未
左ラヌヤ早ク帰ルハシト怒セ玉フ勝雅諫テ
曰使既ニ再ニメ其旨ニ從ヒ玉ハナル時ハ
○秀吉參州ニ兵ヲ發セシ然ルニ今國中ヲ見ル
ニ城壘未タ修セヌ要害ナラス唯放鷹ヲ好ミ
玉フ而已ナラス危カラヌヤ神君勃然トシ
テ汝今無益ノ言ヲ發ス秀吉カ兵十萬ニ過ハ
カラス吾五州ノ勢ニ回万アルハシ秀吉カ軍

卒多シト云フ凡地形ヲ知ラス吾士卒寡シト
云一氏能地利ヲ諳ニス峻隘ニ迎ハ討ハ吾利
ヲ得ニ了掌ノ中ニ在リ汝長久手ノ捷ヲ忘レ
タルカ重テ来ラハ汝命危フカラント宣フ
○三使大坂一飯着シ神君ノ旨ヲ演説ス秀吉
且怒リ且徳川家ハ大剛將ナリト感激セラル
丹羽長秀蒲生氏郷堀秀治等頻リニ神君ト和
平ノ事ヲ諫ム或夜秀吉深更ニ及シテ俄ニ信雄
并其臣羽柴勝雅ヲ營中ニ招テ寢殿ヨリ片手ニ
照差片手ニ紅ノ細帯ヲ携ヘ一壺ニ燭ヲ秉ラシ

メ出テ信雄勝雅ニ對顔シ吾多日思惟シ家康
ヲ上洛ララシムト宣フ二人驚テ其詞ヲ出サス
秀吉曰吾妹ヲ以テ家康ニ嫁ス一ニ堀尾茂介
吉晴生駒甚助正俊侍座シケルカ其妹ト云ヘル
ハ誰ソ秀吉曰佐治日向守ニ嫁セシ妹ナリ渠未
タ子ナシ是ヲ取返シ濱松ニ贈ル一ニ佐治ハ殊
ニ思慮深シ其妻ヲ返サスハ天下治ルヲ得
スト云ハ、何リ難哉ス一キ既ニ嫁要ヲ遂テモ
家康尚其疑暗ナル時ハ大廳ヲ送り質トセハ
家康ノ上洛猶豫ス一カラスト宣フ信雄以下大

其英智絶才ノ程ヲ感ス翌朝生駒堀尾速カニ
佐治カ許ニ赴キ右ノ旨趣ヲ述ル処日向守カ曰
秀吉ノ命畧リ入畢ン又今吾夫婦死ニ就ン下ハ
血氣ノ致ス所國家ノ害ナリ妻ヲ返メ天下治ル
ハクンハ奈何ソ是ヲ厭ハン然レモ吾存命シテ
ハ尚然ルハカヲスト謂テ忽自殺スト云ニ

○廿二日秀吉ノ使節トシテ織田源五長益羽
柴下總守勝雅天野佐左衛門雄光及富田左近將
監知信大坂ヨリ冬州吉田ニ至テ城主酒井左衛

門尉忠次ニ謁シ秀吉ノ意趣ヲ説ケレハ忠次モ
秀吉ノ神君ト和ヲ整ント欲セラレ其情ノ厚
キ下ヲ感シ四使ヲ携ヘ吉良ノ旅館ニ至レリ
神君ハ秀吉再三ノ使節對顔無益ト宣フ処ニ忠
次カ曰是上洛ヲ勸ルノミニハ非ス賀儀ノ使十
リトテ神君ヲ強テ渠等ヲメ謁ヲ執レム四使
秀吉ノ命ヲ述ル処ニ漸ク御許容有リシカニ
條ノ盟ヲ望ミ玉フ四使其草案ヲ請フト云ハ
各先ニ飯リ登リ秀吉ノ旨ヲ聞届来レハキ旨
御諒アリシカ秀吉ノ密意ヲ請テ尾州清洲迄淺

野弥兵衛長政下向メ滞留スル旨ヲ述ル神君

疾々長政ヲ呼一キ由仰セケル則其夜清洲

一飛使ヲ奏ス

○廿三日午ノ刻淺野長政後任彈正少弼吉良ニ着ス

神君ハ秀吉ノ誓約之ケ條ヲ望玉フ第一秀吉妹

朝日姫ノ腹ニ男子ヲ儲ルニ是ヲ以テ長九君

台徳ニ代テ嫡子ニ成サシ由ヲ請フ一カラス第

公也ニ代テ嫡子ニ成サシ由ヲ請フ一カラス第

二ハ今度和ヲ整テ長九君ヲ以テ都一質ニ納

ントスルヲ十カラシテ此以後徳川殿没セ

ラルニ分國參遠駿甲信相違ナク長九君ヲ以

テ守護トシ僅ニ其年八歳ト云一ニ秀吉能ク是

ヲ愛情ニ等閑有ヘカラナル旨ヲ以テ盟約アラ

シ由ヲ望玉フ草案ノ執筆ハ神尾庄左衛門ニテ

同朋内田善阿弥是ヲ沙汰スル処ニ弥兵衛是ヲ

披閱シ懷中ヨリ秀吉自筆ノ草稿ヲ出シ讀ケル

ニ神君ノ望ミ玉フニケ條ト符合メ列居ノ族

明將ノ智均ニキテヲ歎羨ス長政懷中ヨリ冥社

ノ牛玉ヲ出シ右ノ草案秀吉自筆ニ給ナキ由ノ

盟ヲ成ス然メ驛次ノ飛檄ヲ奏メ秀吉一達ス

○廿六日夜中秀吉自筆ノ回簡驛次ヲ以テ到

来し神君ノ御許容アレルヲ欣然ノ上羽柴勝
雅天野雄光ハ清洲へ皈リ織田源兵衛
濱松ニ至テ徳川家飯城ノ期早速結納ノ使節
ヲ差登セ玉フヤウニ洩達ス一キ由ヲ諭カレト
云々
○廿七日神君吉良ヨリ岡崎迄還御織田長
益浅野長政モ岡崎ニ来リ元老ニ拠テ秀吉ノ
旨ヲ言上シ翌日ハ爰ニ滞留ス
○或曰神君北條氏政父子ト駿州沼津ニ嶋
ノ間ニテ會盟アラントテ昨廿六日駿府迄下

向シ玉フ供奉ノ諸卒嶋田ニ止宿スト云恐ラ
クハ非ナラン
○廿九日神君濱松へ還着セラル
○晦日御家人成瀬藤八郎浅井雁兵衛先客ニ
テ岡崎ヨリ長益長政濱松ニ至テ登堂ス此夜猿
樂ノ囀子ニ番催ナレ右両使ヲ饗應シ玉フ當四
月中朝日姫濱松へ下向入楽アル一ニ追付結納
ノ使節ヲ登セ玉フ一キ御旨ヲ蒙アリ両使退
出ス
○秀吉去年閏八月以来經營セラル洛陽聚樂ノ

城造畢シ又南北ハ一條ヨリ二條ニ至リ東ハ堀
川ニ至テ西ハ内野ヲ限リ本丸ニ假山并山里花
園アリ外郭ノ黒門日暮門等ノ壯觀寔ニ希代ノ
結構ト云ク
三月大
○朔日 秀吉ノ兩使濱松ヲ發途ス
○廿日 神君ヨリ結納ノ御使本多平八郎上京
ノ夕大濱松ヲ發ス
○十一日 本多忠勝聚樂ノ城ニ登リ秀吉ニ詣
シ幣物ヲ捧ク秀吉大ニ歎ヒ忠勝カ勇名古今ニ

獨歩シ宇宙ニ瓊綸ス殊ニ在々年長久手戦ノ日
竜泉寺ニテ微兵ヲ牽テ吾二万八千ノ大軍ニ並
ンテ押行火砲ヲ發シ武威ヲ奮フトキ忽撃捕
ント云一氏一度ハ家康ト交和ヲ整一婚家ト
成ラント欲ス然ル時ハ秀吉カ臣ハ家康ノ臣
ナリ家康ノ被官ハ秀吉カ被官ニ均シカラ
汝カ如キ英雄ヲ助ケ置トキハ國家ノ鎮護タラ
ント欲セシ故也今賞スルニ黄金ヲ以テセハ多
キ時ハ家康ノ疑爰ニ生ス一ニ寡キ時ハ他聞
ヲ厭フユ一吉光ノ賜指定家郷小倉山庄ノ色紙

以上二色天下ノ名物ヲ以テ汝ニ授ク汝カ如キ
勇烈モ四海ノ名物ナレハ彼両品ヲ與ヘテ弥其
英名ヲ顯ス昔ヲ述テ彼両品ヲ授ケラレ小倉ノ
色紙ハ伊勢ノ國司北畠具教卿ヨリ連歌師紹巴
ニ賜フ五十枚ノ内十リ其歌ハ
○或ハ神君結納ノ使節トメ天野之郎兵衛
康景ヲ登セ玉フ秀吉昔末夕天野カ名ヲ聞ス
酒井本多榊原カ内ヲ登セラレト云ク爰

文のりつゝ小りるか

於テ信雄ヨリ土方勳兵衛雄久後任河内守ヲ以テ
神君ニ告ラレ処ニ甚夕御氣色アリテ結納ヲ
黙止玉ハント宣フ土方カ曰今ニ至リ此約ヲ
變シ玉ハ信雄何ノ面目アリテ秀吉ニ謁セ
ンヤ信雄ニ對シ者如セラレ三人ノ内ヲ登セ
玉ハト神君遂ニ渠カ詞ニ應シ四月廿三日
濱松ヨリ聚楽一本多忠勝ヲ登セラレ使節首
尾克勤メ終リ五月廿日忠勝濱松ニ飯糸スト
云々又秀吉ヨリ忠勝ニ賜ルニ相州貞宗ノ照
指小倉ノ色紙天野康景ニモ高木貞宗ノカヲ

賜フ氏云一リ貞宗初濃州ニ任シ鍛ヲ慶ノ刀
移シ正宗カ傳ヲ受鍛精シケルヲ世ニ尚賞愛
シ相州ノ貞宗ト云一リ

○是日神君黃瀬川ヲ越テ豆州ニ嶋ニ於テ北

條氏政同氏直ト會盟シ玉フ是ハ左ル天正十士
午年交和整フテ氏直ヲ掣トセラルト云一トモ
未夕對顔シ玉フコト無キ工一ト称シ此美ニ及
フ然レ氏御底意ハ彼父子以後誠實ヲ顯ハシ
御當家ト合躰アラハ兩旗ヲ以テ常陸下野等ヲ
伐從一玉ハント欲セラレ且ハ秀吉ト鋒楯ニ及
セラル氏更ニ憂一玉ハスメ一戰ヲ快ク決セラ

ル一キ爲也北條氏ハ伊勢衆ノ支流工一故實殘
テ文質備レリ必皆長袴ヲ着ス一ト察セラル
御家人其支度ヲ成ス処ニ氏政其心奢リ草袴ヲ
着シ早ク上席ニ着ヲ一門ノ歴々群居ス然レ氏
御當家ノ臣油断ナク草袴ヲモ携ハケレハ悉ク
長袴ニ代テ着用ス松平御一族ハ一人モ扈從セ
ス酒井忠次井伊柳原等供奉ス氏政ヨリ大鷹十
二懸良馬十匹雄劔一腰ヲ一神君ニ進上ラリ
神君モ又緘二百端虎皮豹皮各五枚握々純二間
守家ノ刀鞘一文字ノ太刀薙刀南蠻鳥銳ヲ氏政

三贈うル國俊ノ刀吉光ノ服差ヲ氏直一授うレ
獻酬酣十レ時酒井左衛門尉起テ海老救川ノ戲
遊ヲ成ス氏政殊是ヲ賞シ一文字刀貞宗ノ服差
ヲ授ク兩家好ミヲ結テ互ニ退散ノ期ニ及ヒ
神君ハ氏政ノ功臣山角紀伊守定方ヲ召連玉ヒ
沼津迄皈御渠カ眼前ニ當城ノ城ヲ毀タシ大
兩家人封境ニ城構十ク衛兵ヲ置テ示シ
玉フ
○廿一日 神君駿府ノ城ヨリ濱松ニ還入セラ
ル

四月小

○二日 神君御異父弟駿州久能城主松平源三
郎勝俊享年三十五歳ニシテ卒ス

○十日 秀吉ノ妹朝日姫聚樂ノ城ヲ出雲ト云
淺野弥兵衛長政津田四郎左衛門富田左近將監
滝川儀大夫伊藤太郎左衛門朝日姫ノ乳母子也扈從ス信

雄ヨリ送リトメ伯父源五長益羽柴下總守勝雅
飯田半兵衛相隨テ娼妾百五十餘人花簾ヲ尽シ
駕ニ從テ神君ヨリ酒井小五郎家次内藤三左
衛門信成松平主殿分家忠三宅惣左衛門康貞高

力與左衛門正長後任河内守 神原隼之助忠政久野左

大夫宗秀粟生長藏島居忠兵衛ヲ以テ參州ノ地

ニ迎テル

○廿日 朝日姫濱松ノ城下神原小平太カ宅ニ

着駕爰ニテ旅装ヲ改メ城中ニ入楽シ玉ヲ酒井

河内守重忠御樂ヲ請取テ替禮ノ儀式遂行ル秀

吉ヨリ姫君ハ附人清水平左衛門正親山本千右

衛門ナリ

○廿六日 神原康政御使トシテ濱松ヨリ今日

聚樂ニ至リ先富田左近將監知信カ宅ニ着シテ

ル処秀吉忽然トメ夜ニ入來臨アリ康政拜謁ス

秀吉ノ曰去々年小牧陣ノ時康政廻文メ曰秀吉

既ニ信雄郷ト兵ヲ締テ實志君恩ヲ惡逆無道々

ル下誰カ憎ミ視ナラシ然レモ諸將義ヲ辨ハス

シテ同意スル者多シト書ス吾是ヲ讀テ怒氣胸

臆ニ滿ル故ニ募リ令メ康政ヲ殺ス者アラハ具

首ヲ見テ吾一笑ヲ快クセシ最モ當座ニ賞ヲ施

シ且國ヲ授ク一キ旨觸促シケルカ當時 家康

ト婚家ノ好ミヲ成シケルカ其忠信ノ厚キヲ

感慨ニ舊恨悉ク散シテ汝ニ見ヘシト欲スル下

親切ニメ其登堂スル下ヲ待スメ爰ニ来ル康政
ハ吾妹ヲ子ノ如クメ衰憐心忠ヲ竭ス一キ旨宣
フト云々
○廿七日康政登堂ス秀吉厚ク是ヲ饗セラレ
ト云々一説ニ康政カ濱松ヲ棄テ
○中旬濱松城中ニ舞臺ヲ構ヘ神君嫁娶ノ
賀并朝日姫台徳公ヲ以テ八歳其子ト成レ玉
下賀儀ノ猿樂ヲ興行三日ニ及フ此時台徳公
ノ児小姓十五人一秀吉ヨリ奈良晒白惟子一藝
生箱ニ摺箱ノ帯一筋宛授ケラレ所謂長谷川倉

之助正吉本多山縣成重後改丹下小幡熊千代景憲後改
勘兵衛植村久太郎長坂血鐘九郎信宅九毛辨千代
重成後改牛弓氣多玉千代本村伊勢千代元政後改
源太竹尾千代松奥津千代松小笠原虎福等十リ同
朋善阿弥危厨ノ頭神谷又五郎正重モ賜リモノ
右ニ同シ弱年ノ走衆等ニモ吾州白布惟子一宛
ヲ與ヘラレ

七月小

○神君上洛ノ事ヲ群臣ト議シ玉フ酒井左衛門
尉諫メケルハ秀吉カ胸中尚量リ知ルハカラス

信スヘキ頃ニ及ヒ上京セラレ然ルヘキ欲若秀
吉怒テ兵ヲ棄シテ戦ヒ味方ノ敗スルト有ヘカ
ラスト云々諸臣皆是ニ同ス爰ニ於テ 神君聊
上京ノ沙汰ヲ止ラレ或ハ秀吉是ヲ怒リ質子冬
河守秀康君ヲ殺サントスル吉アリ 神君ハ往
年秀吉請テ秀康ヲ養子トス今養子ヲ殺サントハ
渠カ不仁也吾是ヲ悲ニテ膝ヲ屈メ彼門下ニ至
ラニヤト宣フ此事漸ク秀吉ノ耳ニ觸ル
○十七日 信州ノ真田安房守昌幸誅伐トメ駿
府ニテ 御出馬アリ

○十四日 皇太子 誠仁 薨御 太上天皇ノ尊號
ヲ授玉ヒ陽光院ト謚シ玉フ

八月大

○七日 秀吉ヨリ真田カ方ヘ密旨アリテ渠飯
降ノ情ヲ顯ス工一 神君ノ御出馬屢猶豫セラ
ル
○九日 秀吉参州荊屋ノ城主水野忠重ヘ回章
ヲ送ル

書物委細加被及公家康甲辰一ノ如御公行
信州以之ニテ方々御出馬ノ幸旨ハ物支家康迄

甲子のうし得は條主子ハ子海澄松ニウシム
信濃康正親公付テ今方留ラレテ

一 志田成敏ニ人殺執ハ身家康正母子ハ

○ 志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

○ 志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

○ 志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

○ 志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

○ 志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

○ 志田成敏ノ討果候事一ニハ子ハ家康遠ハ

一人殺入由ハ條主城ハ家康正親公
所用ニハ信長子信玄家康正親公ハ
信長子

一 右ニ志田成敏ニ志田成敏ハ志田成敏ニ人殺

執事ハ志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ

志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ

志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ

志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ

志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ

一 志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ志田成敏ハ

一 中越の何れも家康たちのうねり法中
中越の除進くす中越の

一 小笠原方一隊家康より中越の内へ入り
中越の除進くす中越の

一 中越の除進くす中越の
中越の除進くす中越の

八月九日 秀吉

水神惣三湯及

○秀吉如斯上の弥 神君真田ヲ撃滅し玉フ一
キ処ニ昌幸ハ勿論木曾小笠原モ 神君秀吉ト
和融し玉ヒ景勝カ後援ノ頼ミ絶ケレハ信甲西
州ノ諸将ニ倚テ頼リニ歎訴セシメ 神君ノ御
出馬ヲ止ラレ幕下ニ皈服スヘキニ決スト云々
○十四日 秀吉先月以來聚楽ノ城ニ住セラル
処島津修理大夫義久猛威盛ンニメ鎮西靡キ從
テ故征伐トメ中國勢ヲ豊前ニ奪セシメ黒田勘
解由孝高宮城入道ヲ監軍トメ差下シ今日大坂
一 還入セラルト云々

○十六日 神君甲州ヲ巡視シ玉フ序ニ彼國中
強カノ族ヲ召テ相撲ヲ取セ 御覽アリシ處ニ
秀吉ヨリ懇懇ナル書牒ヲ送ラル其宛所酒井左
衛門尉殿御披露ト云
○廿四日 秀吉ノ飛檄到来ス其趣ハ嶋津義久
追討ノ爲ニ来春九州ニ出陣セントス其軍議ヲ
遂ニキタメ濃州ノ地ニ来临アランヲ希フ既
ニ婚家ト成ル上ハ御上洛アラハ幸甚タラン今
秀吉ニ屬スル族ハ皆信長ノ御時同列ノ諸侯々
ルニ一爵ヲ授ケ禄ヲ與フト云ハトモ折々ニ觸

テハ猶主ト仰カナル者多シ 徳川家爰ヲ畏惟
セテ上洛シ玉ハ、秀吉カ威望忽凜々タラン
此上ニモ 家康尚狐疑シ玉ハ、吾母大廳ヲ濱
松一下シ質ト成ス一キ由ノ自筆ノ書簡タリ而
刻 神君躬ツカラ筆ヲ執テ是ヲ許容シ玉フ由
返簡ヲ遣ナルト云ハ 臣密々ノ儀工一知ル者ナ
シト云
○廿五日 甲州ヲ奈途巨摩郡下山ノ滿澤ニ御
止宿アリ

○廿六日 駿府ノ城ニ着 御

○廿七日 掛川ノ城ニ至リ玉フ

○廿八日 濱松ニ 御帰城アリ朝日姫ハ秀吉

ヨリ附属セラレシ山本千右衛門早打ニテ上京

シ 神君ハ大聴ヲ贈リ質トセラレハ早速上洛

シ玉フ一キ密旨ヲ述ル秀吉大ニ悦ンテ山本ニ

金熨斗附ノ刀服指ヲ授ク

九月小

○十一日 吉辰タル工ハ 神君假ニ駿府ノ城

ニ移リ玉フ幕下ノ部将群衆メ 神君并 若君

ハ太刀折紙或ハ樽肴ヲ獻シ是ヲ賀ス未タ營構

成就セサル工ハニ早速濱松ニ御飯城アリ

○廿四日 神君岡崎ノ城ニ渡リ御

○廿六日 秀吉ノ使淺野彈正少弼長政津田隼

人佐富田左近將監知信且信雄ノ副使織田源五

羽柴下總守土方勘兵衛岡崎ニ来リ 神君ノ御

入洛ヲ催シ秀吉ノ母堂ヲ質トシ下サニ旨言上

ス是嚮ニ密々是ヲ許シ玉フ工ハ也六使拜謁シ

テ御信容ノ旨ヲ蒙リ飯リ登ル干時秀吉ノ弟大

和參儀秀長色ヲ起メ曰聖善ヲ敵ニ送ラシテ武

門ノ瑕瑾是ニ過シ秀吉笑テ大行ハ細瑾ヲ顧ス

汝心隘之共ニ計ルニ足ラスト宣フ然メ秀吉ヨ
リ井伊本多榊原カ親族各一人ヲ大坂ニ送ラン
一ヲ請フニ傑義諾ス神君不日ニ岡崎ヨリ濱
松一飯御

十月大

○四日秀吉執事奏アリテ神君權中納言ニ
任セラルル羽柴秀長權中納言ニ任シニ好秀次ハ
參議ニ任ス

○十三日神君御入洛アルヘシトテ濱松ヲ發
途シ玉フ菅沼藤藏定政ヲ台徳公ニ附屬セラ

ル茶入且錢舞擧カ畫圖一幅ヲ賜フ

○十四日吉田ノ城ニ御止宿アリ

○十五日岡崎ノ城ニ着御秀吉ノ母堂來着

ヲ待セ玉フ諸臣皆曰今秀吉天下三分ニ治メ

テ實トシテ大聽ヲ送ル疑ラクハ偽計ナラン歎

ト神君ハ最モ疑イナクハ非ス然レモ渠禮

ヲ以テ大廳ヲ贈ルヲ信セサル時ハ秀吉ヲ甚々

恐ルニ似タリトテ諫ヲ容玉ハス

○十八日大廳池鯉鮒ノ驛ニテ下着松平主殿

ハ出向テ衆衆ヲ警固ス

○九日 大廳岡崎ノ城ニ着セラル 神君ノ簾
中濱松ヨリ當城ニ至テ母子相看セラル爰ニ於
テ群臣皆其實ナリヲ知テ疑惑ヲ散ス 武徳大成
大廳岡崎ニ到着ナリニ 神君岡崎ヲ出ニ 十八日
御洛ニ赴キ玉ヲト有リ其實ヲ愷ニセス
神君井伊兵部ニ密旨ヲ諭ナリ當正月備立定ム
ニ參遠駿甲信五ノ國ノ惣軍四万二千ノ内一万
二千此度供トシテ島居平岩ヲ甲信ニ止メ石川
家成大久保忠世ヲ濱松ニ留主トシ四人ニ二万
千餘兵ヲ附屬ス汝ニハ一万人ヲ附屬ス本多重
次ト凡ニ岡崎ニ止レ所以ハ秀吉表裏アラハ昔

洛陽ニ火ヲ祭シ東寺ニ插菴ルハ一ニ素ヨリ信雄
昔ニ合鮓ス其旨信雄ヨリ注進セラレハ汝ニ預
ケ置所ノ士卒一万人ヲ二十備ト成シ且左衛門
尉平八郎小平太カ残シ置組ノ士卒一万ヲ又二
十備ニ成シ尾州佐屋ノ渡リヨリ江州千種越ヲ
押登リ敵若クハ大津ニ於テ拒カハ武田勝頼カ
長篠ニテ蒐リシ如ク真驀ニ突崩スハシ味方ノ
鎗先ニ上方勢一手モ遭ハカラス又勢田ノ橋ヲ
燒落ナハ彼六七町此方ニ宇治田原ハ出ル道ヲ
リ其処ニ案内者ノ角カ者二人附置也洛ニ入ハ

東山ノ八坂ニ屯シ秀吉聚衆ヲ去テ大坂ニ引退
ク知リ吾本陣東寺ノ勢ト立候ニテ撃捕ヘシト
丁寧ニ軍令ヲ含メラル信雄ハ勿論若川并加賀
松任ヲ領スル丹羽長重門上郎左衛州松ヶ嶋ノ
浦生氏郷江州比田ノ長谷川藤五郎秀一佐和山
ノ堀久太郎秀治等内々起請文ヲ以テ御當家ニ
内應セシムル工ニ此度秀吉黒心ヲテハ知テ
神君天下ノ主ト成リ玉フ一キ者歎是ニ於テ井
伊直政本多作左衛門重次岡崎ノ城ヲ守リ大廳
ヲ嚴シク衛護シ柴薪ヲ其居間ノ側ニ積ニテ洛

陽ニ於テ神君ニ災害起ラハ大廳ヲ忽燒殺シ
ニトス濱松ノ御留守ハ石川日向守家成大久保
七郎右衛門忠世甲州ニハ島居彦右衛門元忠平
岩七之介親吉在任シ惣軍ノ内ニ万人ヲ大久
保平岩島居指揮ス一キ旨教令アリ寔ニ雄謀ヲ
竭セル処ナリ
○六一日 神君岡崎ヲ棄テ玉フ秀吉ノ命ニ依
テ所々ノ驛亭ニ米穀草藁野菜魚鳥等山ノ如ク
積貯ニ道路ヲ洒掃シ処々ニ於テ數万ノ徒者ヲ
饗應ス

○廿二日 勢田ノ馭ニ著 御織田信雄當時尾
陽ノ太守夕心工一尚々丁寧ニ是ヲ享シ玉フ
○廿三日 勢州四日市場ニ著 御
○廿四日 同州関ノ地藏ニ著 御
○廿五日 同州土山ニ著 御
○廿六日 同州石部ニ著 御
○廿七日 御入洛兼テ恩遇渥ク蒙フルニ三條新
町ノ大商茶屋四郎次郎晴延カ宿処ヲ旅館トシ
玉フ秀吉ヨリ舍弟秀長并浅野長政ヲ以テ
神君ノ上京ヲ賀シ二三日以来風氣夕心間暫ク

對顔延引ス一キ由ヲ達セラニ其夜深更ニ及ニ
テ 神君寢室ニ入玉フ処ニ秀吉扈從ノ人聊モ
召具セラレヌ大和中納言浅野弥兵衛備ハ歩士
許ニテ其中ニ交リ步行ニテ密々茶屋カ亭ニ至
リ浅野先客メ秀吉来臨ト称ス秀吉御寢室ニ入
テ 神君ノ傍ニ蹲踞シ長篠陣以来不能向顔
十二年然レモ御容貞壯ニメ今上洛セラレ秀吉
ニ天下ヲ授ケ玉フ厚情浅カラヌノ由是ヲ謝シ
刀服指ヲ進上是即輦引出物ト云々且辨當ノ黑
ヲ開キ秀吉長政配膳シ 神君一獻スル食者皆

秀吉是ヲ取テ試ニ喫シテ神君一進メ且賓主
獻酬シ其情ヲ竭シ聚樂一飯城セラル

○雍政府志ニ曰茶屋暗延宅新町ニ條伊藤町

南也至干今斯宅不罹水火之難現然存是

神君餘光之所及乎

○七八日夜中秀吉躬ツカラ白雲ノ茶壺ヲ携

一來リ神君一進上アリト云

○九日一夜中秀吉又黄金ニ百枚携一來リ玉

口供奉ノ小祿ノ士ニ配分シ玉ヲ一レトテ是ヲ

神君ニ授ケラル

十一月小

○朔日夜中秀吉義服ヲ携一來リ神君ノ著

用ニ備フト宣フ且明己ノ刻對顔セシ其時兼テ

達スル如ク懇懇ニ禮ヲ成シ玉一其故ハ徳川

家スラ恭敬セラルト驚テ向後大名等カ秀吉一

主君ノ禮ヲ尽サンフヲ欲スト演ラル神君是

ヲ諾シ玉ヲ先達テ明己ノ刻冬遠駿甲信且州ノ

牧徳川黄門登堂對顔アルニ卯ノ后刻大小

名烏帽子直垂ニテ登城ス一キ旨觸ラル

○二日神君聚樂ノ城ニ至リ玉ヲ太刀一腰

繪

黄金百枚良馬十匹ヲ贈ラル新庄駿河守直頼披
露ス神君中壇ニ揖ノ禮ヲ遂玉フ諸候皆驚テ
曰今般秀吉ノ母堂ヲ質トメ上京ノ処如斯秀吉
ヲ敬セラル上ハ弥吾輩秀吉ヲ慕シク仰カン由
ヲ称ス今晚大和中納言秀長ノ宅ニテ神君ヲ
饗ス彼陪臣等神君ヲ窺ヒ見ル処ニ秀長後段
ノ饗應沙汰セシ爲ニ其席ヨリ退去アリケレハ
障子ニ立傍テ餘多窺ヒ居タル輩這々退散ス其
音ヲ聞テ神君ニ震アラシク御家人百餘袴
ヲ高ク引揚刀ヲ取テ闕キケルカ中ニモ成瀬小

吉正成後任集
人正刀ヲ拔テ奥へ馳入処ヲ近臣ノ長

大久保新十郎忠隣後任治
部少輔卒爾也能聞届一キ由

是ヲ制ス干時富田左近將監出テ右ノ旨趣ヲ述

テ是ヲ靜メ大廳ヲ濱松へ質トセラル上ハ關白

殿ノ表裏聊カ是ナシ粵ニ酒井本多榊原伺候セ

ラル大久保新十郎鳥居新太郎永井傳八郎尚勝

往テ實否ヲ見届ラル一シトテ三人ヲ携一行ケ

レハ此事秀吉聞玉ヒ徳川家ノ勇士斯ニテ主

君ヲ厚ク崇フエ毎戦微勢ヲ以テ猛勢ヲ伐崩

ス由称譽セラル

○三日秀吉猿樂ヲ催シ神君ヲ享セラル金

春大夫是ヲ勤ム式ニ番大藏弥門口 春藤六十右衛門

ト云

○四日大和中納言秀長神君ハ朝餉ノ饗ア

リシ其半ナル時秀吉小袖ノ上ニ白紙子襟袖先

赤キ地ニ桐唐草萌黄白浅黄色々ノ縫紅梅裏ノ

羽織ヲ着シテ俄ニ其席ニ来臨アリテ伴食セラ

レ其上秀吉臺子ニ臨ミ躬ツカラ喫茶ヲ黙シ

神君ニ進ラセントアル上ニ神君茶碗ヲ受ン

ト席ヲ立セ玉フ時秀長長政神君ハ秀吉ノ密

意ヲ述ル然メ茶ノ享終リケレハ聚樂ノ城ハ

徳川家ヲ携ヘ餞別ヲ惜メントテ相伴ヒ門外ハ

出玉ハ毛利輝元浮田秀家長曾我部元親以下

ノ牧伯其一族老臣迄蹲踞セシム秀吉是ニ向テ

大政所ノ飯京ヲ急キ家康ヲ疾々下向アラシ

ムト宣フ干時秀長長政神君ノ御肩衣ヲ取進

臣ニ是ヲ渡シ神君ノ御股ヲ搦ル神君則秀

吉ノ側ニ立寄セ玉ヒテ彼紙子羽織ヲ授ケラル

一キ旨御誕アリ秀吉ハ是昔鎧ノ上ニ着スル

胴服タリト辞シ玉フ神君然ラハ尚是ヲ賜ル

一之 家康カ在ラハ貴客ニ甲曹ヲ著サセシ
キト宜フ秀吉依然不料則羽織ヲ舐ツカラ
神君ニ著セラレ今皆聞ル如ク家康ノ吾ニ鎧
ヲ著セシキ由領掌アリ誠ニ能聲ヲ取タリ果
報由々敷秀吉ナラスヤト吹調セラル且中國四
國ノ牧伯扈從ノ多勢ナルヲ咎メ神君ニ向テ
是ヨリ清水寺一詣スル夕モ陪從ニ之万ニ及フ
由感言セラル此時ノ神君ノ御誕忽内々ニ流
布シ德川家ノ此詞アルトキハ秀吉ノ鋒先ニ
海内指実者アラシト恐怖ス然メ聚樂ノ城内ニ

入 神君ヲ饗セラレ 德川家ノ簾中時々大廳
一詣セント欲シ或ハ有馬ノ温泉入湯トメ上京
ノ夕メ聚樂ノ城下ニ 德川殿ノ館ヲ授ク一シ
トテ浮田宰相等ヲ始諸候ノ宅ニ軒ヲ退ク一シ
書院ハ秀吉是建一シ扈厨ハ秀長是ヲ造ル一シ
監使ハ秀長ノ老臣藤堂與右衛門高虎後任位
渡守ニ
命スル長屋ハ 德川家ヨリ經營アル一シ其料
ト祿シ黄金三百枚ヲ授與セラル留守ノ任ヲ尋
子ラニ井吹市右衛門ヲ以テ守ラセン由御挨拶
アリケレハ秀吉市右衛門ヲ呼出シ盃ヲ賜リ黃

金養服ヲ與一テ然シテ御在京ノ第厨料トメ
江州守山以下ノ地三万石附属セラレ酒井左衛
門尉ニモ京師ニ宅地ヲ賜リ且江州ニテ采邑千
石ヲ授ケテ忠次ニ恩賜ノ屋敷ヲ櫻井ノ亭本
多柵原奥平等各宅地ヲ洛陽ニ於テ與一長久手
ノ軍ノ物語十ト有テ其忠勇ヲ褒賞セラレ
神君ヲ種々饗應ノ上ニ好郷ノ刀正宗ノ短刀巢
鷹ヲ進上アリ
○五日 神君洛ヲ出テ飯國ニ赴キ玉ヲ秀吉吹
擧セラレ今日 神君正ニ位ニ叙シ玉ヲ秀長モ

又然リ

○七日 當今正親町 御位ヲ 皇太子 周仁

讓リ玉ヲ 周仁ハ陽光院ノ御子ニテ

○九日 本多平八郎忠勝柵原小平太康政從五

位下ニ叙ス 忠勝ハ中務大輔ニ任シ

○或曰 神君去月廿日岡崎ヲ御登駕九廿日

御京著秀吉其日大坂ヨリ聚樂ニ到着夜中

神君ノ假館茶屋カ宅ニ潛行シ 神君ニ謁シ

廿六日大坂へ飯テラル 神君モ御在京淀ヨ

リ船ニテ大坂へ赴セ玉ヲ大和中納言秀長森

口ニ迎フ則秀長ノ宅ヲ假館トセラル廿七日神君御装束

ヲ整ヘテレ城ニ登リ玉ヒ秀吉ハ御對顔干時

厚ク饗應アリテ薄暮ニ秀長ノ宅ハ飯御コレ

ヨリ弥奔走ノ至極ヲ盡シ神君飯國ノ情ヲ

忘レ玉フニ至レリト云此説大ニ非ナリ

○又曰神君洛陽ニ暫クノ御滞留ナク大坂

一赴キ玉ヒ御登營ノ時信雄同シク隨テ玄關

ニ至ラル秀吉式臺ニ迎ヘ玉フ神君謙讓ノ

至リ信雄ノ後ニ歩ミ玉フ秀吉進ニテ神君

ノ御手ヲ執テ信雄ノ先ニ進メ營中ニ請ヒ是

ヲ享セテレ御當家ノ切臣等ヲ呼出シ恟情ヲ

施シ且神君ト共ニ天守ニ登リ千利休宗易

ニ命シ茶ヲ點セシメ享禮ヲ盡ナルト云フ又

非ナリ神君此時大坂ハ赴カセ玉ハナレ

顯然タリ是等ノ説實祿ニ見ユルト云フ氏信

スルナレ

○十一日神君御帰國御留守ノ諸將冬州象尾

州大高表ニ出向テ是ヲ賀ス岡崎ノ城ニ著御

シ玉ハハ士民拵躍メ歎喜シケル先達テ長丸

君台徳濱松ヨリ渡御待受テ御對顔ト云

○十二日 大廳歸京トメ岡崎ヲ祭セラル嚮ニ
秀吉其警護セシ者ヲ問ル井伊兵部直政ト答フ
秀吉驚テ彼長久手ノ役ニ赤鬼^ト世^ト称セシ万千代
歎年齡幾許ソヤト尋子タマフ六六歳ト答フ秀
吉嘆メ曰誠ニ家康ハ希ナル誓ノ将ナリ既ニ
命ノ代リニ納ル大廳ヲ以テ六六歳ノ壯者ニ預
ケラレ然モ渠ニ劣ラヌ又驍将尚麾下ニ餘多出来
ル下ヲマ早ク直政昂大廳ノ供トシ来ル一レト
云ク浅野長政ヨリ忽チ飛檄ヲ岡崎ニ祭メ是ヲ
告ル依之直政大廳ヲ携ヘ登ル 神君遂ニ濱松

ニ還入シ至フ

○十五日 治部大輔從五位下兼駿河守大江元
春卒ス 法諱 海菊 是ハ毛利元就郷ノ次男ニメ吉川カ
名跡タリ

○十八日 大廳歸洛セラレ其後秀吉井伊兵部
ヲ聚樂ノ城ニ招キ是ヲ饗シ石川伯耆守數正ヲ
以テ伴食トス直政渠カ叛心ヲ惡ニテ席中遂ニ
一言ヲ交ヘス且秀吉ノ臣ニ語リケルハ數正ハ
人面歎心ト謂フ一レ累代ノ主君ニ背キ何ノ面
目アリテ臣ニ向顔スルヤト云ク聞者直政カ豪

教ヲ歎羨ス

○廿五日 新帝 御即位アリ秀吉関白ニ任セ

ラル

十二月大

○朔日 秀吉太政大臣ヲ辞任セラレ希有ノ

朝恩タリ且藤原ノ姓ヲ改メ新タニ豊臣ノ姓ヲ

賜フ今日諸國一秀吉令ヲ下シ来春飭ワカラ鎮

西一進奈シ朝敵嶋津ヲ誅伐ス一ニ畿内南海山

陰山陽江州濃州尾州勢州伊州總テ三十七ヶ國

ノ兵大彙二十万人一ヶ年ノ糧米馬芻ヲ考一ヶ年

内ヨリ豊州小倉迄運送ス一ニト云

○四日 神君濱松ヨリ駿府ノ城ニ移リ玉ヒ五

ヶ國ノ本府ニ定メラル管沼藤藏定政 後称土岐山城守ニ

任等濱松ノ城ヲ守ル大久保新十郎忠隣以下漸

ク濱松ヨリ宅ヲ駿府ニ移ス月迫工一御家人移

徙スル一不能多クハ年ヲ越テ妻子ヲ遷スト云

○十二日 關白秀吉ノ先軍四國勢筑紫ニ登向

シ豊後戸次川ニテ嶋津中勢大輔家久 後ノ中勢豊久戸父

ト合戦大ニ敗走シ長曾我部元親カ半弥三郎信

親十河民部大輔存保等若干戦死ス 此存保ハ天

下第一ノ義

男民部大輔元親并仙石權兵衛秀久這々道レ去
存カ子也

○是年北畠大納言信雄從二位ニ叙シ德川冬

河守秀康正四位下ニ叙セラル洛ノ良醫延壽院

玄朔法印ニ任シ神君ノ臣高力與左衛門清長

ヲ土佐守ニ任シ豊臣氏ヲ授ク

○大須賀丑郎左衛門康高カ娘ヲ以テ阿部左馬

今忠吉ニ嫁ス一キ旨尊慮ヲ窺ヒ横須賀一忠

吉ヲ招キ聲トス是ハ忠吉カ父善右衛門正勝ト

康高芝蘭ノ友タル工一十リ

○内藤紀伊守信政子也左衛門信成カ長子也時十九歳大番頭ト

成ル

○小川之益入道ハ勢州ノ産ニテ能書ノ聞一ア

リ台徳公一附属アリテ筆跡ヲ傳一奉ル

○寛平十郎為春勅右衛門重御勅氣ヲ蒙リ信州

ノ管沼小大膳定利カ許ニ寓居ス

○大橋與左衛門重賢尾州津嶋ニ卒ス其弟ヲ織

田勅七郎天正十士年年或大橋山城康忠關東北

士ニ上州白井ト称ス重賢カ子二人アリ嫡子

總州芦戸ニ住ス大藏定次ハ祖父江丑郎右衛門

真野藏人賴包李養子次ハ祖父江丑郎右衛門

定翰後入道入法舟卜号又家又祖又江ノ

...

...

...

...

...

...

...

...

武徳編年集成卷ノ三十二終

